

〈小特集Ⅱ 文献を基礎とした地域研究・地域教育のために〉

平成十九年度は、地域に残存する古典籍、古文獻の調査とその活用を主なテーマとして、地域貢獻研究費の交付を受けることができた。また、同研究費の交付とは別に、これまで数年かけて行われてきた学生の自主研究により、幾つかの成果ががりつつある。そして、平成二十年度からは、日本語日本文学科の履修コースのひとつとして「地域文化コース」が開始される。

ところで、「法人化」に代表される大学政策の大幅な軌道修正の中で、地方の公立大学はその存在意義と独自性について、鋭い自問が必要になりつつある。特に、世間的な意味での「実学」からは遠い人文科学の学問領域においては、それは切実な問題である。だが、いま急いで、人文諸科学の重要性の議論をここに持ち出すつもりはない。そうした根底的な議論もどこかで必要ではあるが、さしあたっては、熊本県という設置団体のもと公立大学法人として存続する、熊本県立大学の文学部日本語日本文学科は、熊本という地にあつてどのような教育を展開し、どのような研究を生みだし、どのように地域と結びついていくのか、それを新たな学科体制の中でどのように構想しているのか

を、ここで明かにしておきたいと考える。そのことが、同時に、今年度の地域貢獻研究費の使途と、その目的を説明することにもなろうと考えるからである。

今年度の地域貢獻研究費にもとづく業務の第一は、ここ数年かけて行ってきた下益城郡美里町の恵照寺というお寺の蔵書調査があげられる。これは日本語日本文学科の学生による自主研究（後援会の補助による）と連携する形をとって実施してきたものであるが、お寺の蔵書という性格上、仏書が主軸をなすのが当然である。そこで、蔵書構成の理解を深め、仏書の中から専門家の眼による貴重書を見いだしていたくために、寺院蔵書に造詣の深い研究協力者に加わっていただくこととした。それが湯谷祐三氏である。お寺での調査の最終日には、そこで見いだされた特徴ある資料の二点について、口頭で簡単な解説をしていた。それをもとに原稿化していただいたのが、本誌掲載の「真宗寺院に伝来する親鸞の伝記資料」である。

次に行なつたのは、これも永年お世話になっている肥前島原松平文庫への訪書旅行である。文庫のご厚意により、これまで学生への書誌学実習的な位置付けで、貴重な収蔵

書の利用、閲覧をお認めいただいている。全国の各種文庫において、年を追うに従い貴重書の閲覧条件が厳しくなり、学生が実際に典籍にふれて書誌を学ぶことが難しくなりつつある現在、大学に独自のコレクションをほとんど持たない本学にとつては、松平文庫からの恩恵は計り知れないものがある。松平文庫との関係については、まずこの点をとりわけ強調しておきたいと思う。今日の行政区分にもとづき、同じ九州にありながら他県として分断して扱う傾向が強いけれども、道州制の議論とは別のレベルで、文化的・学術的には広範な「地域」間の連携が重要であることを、改めて実感させられる。

ところで、近年、これまでの訪書という目的に加え、これも文庫当局のご厚意による新たな研修プログラムが加わることとなった。それが、文庫職員の方々が長い経験の中で培われてきた修復の技術について学ぶ、学生による体験学習である。具体的には、虫損の穴かがりと、料紙の裏打ち、糸による和綴じの技術を学ばせていただいた。とはいえ、一朝一夕で貴重典籍の修復技術が実用的なレベルに至るものでないことは、我々も重々承知のことである。ここ三年ほど続いているこの研修プログラムを、教育として今後どのように展開していくべきか、個人レベルでの継続性、また事業としての継続性、双方から検討すべき課題は多い

けれども、事業展開の一環として、今年度は熊本県立図書館収蔵の和装本について、綴じの緩んだものを綴じ直すという試みを行った。これは、県立図書館当局の寛大なご配慮のおかげである。

勿論、資料の原態保存上の配慮という観点からは、このことに対して様々な意見はありえよう。しかし、こうした作業を通じて、地域に残存する文献資料への親炙の程度からすれば、より深いものへと進んでいることは間違いない。そして、この県立図書館での試みと前後して、技術をより確かなものとするため、松平文庫の元職員の方（本田瑛子氏）をお招きし、本学において再度の研修を行った。ここでは時間の都合と、作業に必要な道具の準備の制約から、裏打ち作業の研修は省くこととなったが、本田氏には虫損直しと和綴じの技術に関して、文章として留意点をまとめていただくことをお願いした。これも本誌に掲載した。

繰り返しになるが、様々な制約の中で今後、このようなプログラムをどう展開させていくかは、未知数の部分が多い。しかしながら、文献資料の保存のために、現在においても修復の作業がつづけられ、よりよい資料保存のための工夫がたゆむことなく続けられているという事実を、まさに自らの手を通した実感として、学生たちには理解されたのではないかと思う。何百年という時を隔て過去の記録を

今に伝える資料（史料）群があり、その読解を通して我々は過去の事実へと迫っていく。それは文学部の学生が学ぶ、基礎的な前提である。しかし、それを単なる知識ではなく、生きた実感とすることは容易ではない。そして、学問的な価値の軽重はあるにせよ、数々の古文獻が案外身近なところに伝わっていること、またそれらが伝わるには、それらを伝えるために多くの人間が介在していること、伝えようとの強い意志が働いて、かろうじて隠滅を免れた例も少なくないであろうこと、そうした背景のもとに、地域に過去の文獻が伝えられていることの意義を、再認識してもらいたい。今回の地域貢献研究費の事業は、そうした研究・教育・地域貢献を複合的に展開していくための布石のつもりである。

先に記した「地域文化コース」とも関わることだが、地域理解の「教育」は、また同時に地域「研究」へも展開していくよう構想されなければならない。特に、学生自身による主体的な研究として。その意味で、これまで日本語日本文学科が取り組んできたフィールドワーク的な教育の成果ともいべき論文と資料紹介とを、併せて掲載した。一つは学生とともに長期継続的に進めている、熊本県立図書館の和装本調査の中から得られた成果を、卒業論文としてまとめたもの。掲載にあたり、再度、推敲をお願いした。

もうひとつは、天草の文学・文化にかかわる学生の自主研究の成果の一部である。今後、研究レベルの深化を更にはかっていかなければならないが、ひとまずの成果報告としてご覧いただきたい。

なお、これまでに記した以外にも、教育に絡めつつ研究成果の社会還元、そして地域の文化施設との連携という課題に応える幾つかの事業を、学科教員の主導のもと、「地域連携センター」の協力を得て実施しているが、それらはホームページ等を通じて紹介しているため、ここには省略させていたたく。

（文責、鈴木元）